



神仏の 確認



川崎ゆきお

「お盆は怪しいですねえ」

「どうして」

「だって、先祖の霊が帰ってくるのでしょ。そしたら町中霊だらけだ。生きている人より多いかもしれないよ」

「見た人はいないだろう」

「そうですねえ。迎え火って、家への目印ですよ。上空から見た場合、迷わないように」

「そうだ。送り火もそうだ。たまに後ろを振り返りながら、ご先祖様は上がって行かれる。迷わないように」

「しかし、迎え火だらけ、送り火だらけだと、分からなくなりませんか。降りてくるときも目印ばかりで、どれが自分の家の火か分からないじゃないですか」

「まあ、昔は今ほど住宅が建て込んでいなかったんだろう」

「ご先祖さんが帰られたことはどうやって確認するのですか。まさか姿を現さないでしょ。一番分かりやすいですが、それじゃ子孫を驚かせることになるし」

「決まりがある」

「どんな」

「だから、お盆の準備だよ。仏壇にそれなりの供え物をしたり、行燈を点けたりする。あとはそれぞれの家での決まり事がある。それをしっかりやれば、来られる」

「でも、確認出来ないし、気配もないのでしょ」

「昔の人は準備さえしっかりやれば、百パーセント来られたことにしていた。もし来られていないのなら、準備がまずかったからだ。何か一つ欠けていたとかね」

「それが盆の行事ですか」

「来られる前の行事を滞りなくやること。ミスは許されん」

「でも、来られたことの確認は出来ないでしょ」

「だから、代わりに行事の段取りを厳しくチェックする。それを確認出来たら、もういいんだ」

「だから、行事は大事なんだ」

「他に確かめようがないからね」

「神様もそうなの」

「ああ、そうだよ。神事も同じだ。お盆より準備が複雑だ。それに何段階もある。また用意するものもかなりある。まあ、神様とご先祖さんとは違うからねえ。ご先祖様と言っても普通の人だ。神様は最初から神様だ。だから、準備も多い」

「神様と仏様の違いは」

「難しい質問をするでない」

「分からないんだ」

「神社と寺を見比べれば、仏事と神事の違いが分かる。神式と仏式でもよい。違いはそこじゃ。神も仏も確認しようがない。見えんからなあ。見えたら大変なことになる」

「儀式の違いなのか」

「そうじゃ」

「その儀式は誰が言い出したの」

「また、余計なことを言い出すなあ」

「だって」

「神様は、まあ、自然や暮らしぶりと関係するものを用意したんだろう。山の神様なら、おそらくこういうのが好きだろうとか、こういう踊りをお喜びになるとか、こういうものにお降りになるとか、それは誰かがそれとなくやり出して、いつの間にか儀式めいたものになったんだ。面倒なら、省略したりとかな」

「何か、子供のおまじないだね」

「そうだな。呪いだ」

「これが形になり、受け継がれて残っておるんだろ。ただ、アレンジしたり、逆のことを間違っ
てやっていたりもするだろうが、そういうのはあとでどうとでも言える。決まりが大事なんだ。
形式がな。一度決めると、それを守る。馬鹿馬鹿しい動作でもな。順番を間違えると神様は来ら
れない。また喜ばれない」

「喜んでいるかどうかは分からないでしょ。見えないんだから」

「だから、さっきから言ってるだろ。聞いてないのか」

「何だった」

「日時や道具や順番を間違えず、しっかり用意出来れば、百パーセント大丈夫なんだ」

「間違えたら？」

「失敗じゃ。来られていないし、喜んでおられない」

「じゃ、どうするの」

「誤魔化す」

「え」

「用意出来ていなかった物には代用品を当てたり、順番を間違えれば、そこだけやり直す。要す
るに、皆で上手くいったと思えばいいんじゃない」

「本当はミスなのに。それは取り返せるわけ？」

「まあ、ミスしたときは、みんなで知らん顔をするのも手じゃ」

「納得出来ないけど」

「それで、家族の結束や、村の結束が図られる。目的はそれかもしれんなあ」

「今は」

「さあ、今は今の神様がいるんだろうなあ」

「神棚や仏壇のない家も多いねえ」

「ああ、そうだなあ。個人ではなく家や村で祭るんだ。そこが今と昔とではちと違う。今は個人
ばかりが五月蠅く走っておる」

「個人情報保護法」

「また、余計なことを」

「はい」

「個人の時代になると、神も仏も、ちと遠くなりけりじゃ」

了